



幸地域訓練会に通った1年間

明石 洋子

計画どおりの期日に希望どおりの男の子。丸々と太った玉のような赤ん坊で、その元気な産ぶ声に、私は感激のあまりうれし涙が出たほどでした。

妊娠中も出産も順調で、お乳をふくませながら、満足げに眠りにつくわが子のぬくもりに、母となった喜びを感じていました。外気浴、日光浴、赤ちゃん体操と、私の毎日は徹之のためにあるようでした。首の座った日—2ヵ月半ば、お座りした日—5ヵ月始め、歩いた日—12ヵ月と、毎日の様子を赤ちゃん日記につづり、写真を整理しては、徹之のめざましい成長ぶりに目を細めていました。どこに自閉的な要素が隠されていたのか、いまでも信じられません。きっかけは、人の暖かさを知る前に、文字のおもしろさを覚えた時からだと思いますが、1才半で数字を読み、書きだしたのはびっくりしました。

教えこんだわけでもないのに次々と吸収し、2才で『あいうえお』を、3才で『ABC』を全部覚え、書くのを見て、近所の子どもとあまり遊ぼうとはしないのを困ったものだと思いつつも、暗記力や集中力、手先の器用さを喜び、『非凡な人間は非凡な発達をする』と信じ、情緒の障害がその奥にひそんでいることには気づきませんでした。健康で体格もよく、活発に運動もでき、字を書く時は正確に読みますし、変わった子だとは思いつつもながらも障害があるとは思わず、地域訓練会に行くのにも決心がつかせませんでした。

でも、外で遊ぶことより字や絵を書くことが好きで、その時間が一番いきいきとしていて呼んで

も知らんぷり。心理の先生の『外部の刺激や経験が大切』との言葉に、昨年2月(3才)から地域訓練会に参加しました。おかげでこの1年間にいろんな経験をつむことができ、人に興味を持ち始め、返事や挨拶をするようになり、指さしてはひとつひとつ言いにくるので、近頃は相手をするのに嬉しい悲鳴をあげるくらいです。

それまでも本を見てはひとりでものの名称は言うし、『こんにちは』なども言って(むしろ読んで)いたのですが、人に使うことはできず、対話になりませんでした。いまでも人から『お名前は?』と聞かれても答えられません。お絵書きの時には『あかしてつゆき』と言って書いているのですが、対話にはもう一歩というところです。

言葉の蓄積はずいぶんできたようなので、早く使えると嬉しいですね。子ども同志の中でこそ情緒も改善され、対話の楽しさも習えたと信じ、これからもできる限り外に連れ出し、いろんな経験をつみ、友だちの仲間入りができるように機会をもうけたいと思います。また私自身、講演会など諸行事に出席して、障害児のことをよく知り、これからの徹之の発達のためにも勉強したいと思います。

こういう子を持って苦勞もりましたが、積極的にこの子を生かそうとする意欲を得、また、まわりの人々の思いやりや暖かさを身にしみて感じ、嬉しく思っております。

—川崎市幸地域訓練会文集

『さいわい』第1号(1977・3)から—

(徹之4才)